ダム湖になって激変した化女沼の水生植物・水辺近くの植物今昔

NPO 法人エコパル化女沼　髙橋　和吉

１．　1979 年～1980 年にかけての化女沼及びその周辺の植物調査から

1979（昭和 54 年）年 5 月に古川市教育委員会から、化女沼の植物の調査の依頼があり、古川植物愛好会の役員が中心となり調査を実施した。

この地域は,周囲４キロメートルの化女沼（化粧沼：ダムができる以前には地域によって化粧沼とも化女沼とも言われていた。）を中心とした長者原、嵐山、苔ノ谷地などのなだらかな丘陵地帯で、すばらしい景勝地でもあり、国指定史跡宮沢遺跡が隣接、この一帯にまつわる神秘的な伝説も多い。

自生する植物の種類も豊富で、絶滅危惧種も多くみられる。鳥類、昆虫類などの種類も多く、沼にはナマズ、ウナギ、コイ、ギンブナ、オイカワ、ゼニタナゴ、ドジョウ等の魚類や大きいドブガイも沢山生息していた。昔から釣りをする人やハイキングをする人など、市民の憩いの場としても親しまれてきたところである。また、化女沼地域に生活をする人にとっては、魚を捕獲したり，ジュンサイなどを採取し生活の糧とし、また、沼の反対側にある水田へ舟で行き来する所でもあった。

1960 年（昭和 61 年）ごろから、以前には見られなかったハスが花を着けるようになり、さらにオオハクチョウが飛来し餌付けを行うようになってからは沼を訪れる人も多くなってきた。

このような化女沼に、田尻川水系の治水と灌漑用水確保を目的としたダムの築造、また、その周辺の開発計画も出てきた。ダムの完成後は、従来の沼の面積 0.3 平方キロメートルを 2 倍強の 0.65 平方キロメートルにし、水位を従来より 2 メートルもアップする予定であるということであった。このことから、沼及びその周辺の動植物に大きな影響を及ぼすことが考えられた。

そのようなこともあり、古川市教育委員会から植物を中心にダム築造前の植物相を明らかにし、保護と保存のための資料とすること、学校での学習資料として利用すること等を目的に調査を依頼されたのである。

調査は、1979 年（昭和 54 年）7 月から 1980 年（昭和 55 年）5 月まで行った。調査人数は 10 名、調査した植物はすべて押し葉標本にして、その標本を同定して植物目録を作成した。

調査の結果、確認できた植物はシダ植物、裸子植物、被子植物合わせて 701 種であった。

その中で、化女沼で出現した水生植物は次のとおりである。

挺水植物

ヨシ、マコモ、ウキヤガラ、アシカキ、クログワイ、カンガレイ、サンカクイ、ミクリ、ハス、ガマ、イヌスギナ、ショウブ、オモダカ、ヘラオモダカ、カキツバタ、シロカキツバタ（16 種）　　絶滅危惧種：ミクリ、カキツバタ、シロカキツバタ（3 種）

浮葉植物

ヒルムシロ、ホソバミズヒキモ、ジュンサイ、ヒツジグサ、ガガブタ、ヒシ、ヒメビシ、

（7 種）　　絶滅危惧種：ホソバミズヒキモ、ガガブタ、ヒメビシ、(3 種)

沈水植物

ミズニラ、センニンモ、ヤナギモ、トリゲモ、オオトリゲモ、ホッスモ、クロモ、コウガイモ、マツモ、フサモ、ホザキノフサモ、タチモ（12 種）　絶滅危惧種：ミズニラ、センニンモ、トリゲモ、オオトリゲモ、ホッスモ、コウガイモ、タチモ（7 種）

浮遊植物

イヌタヌキモ、ウキクサ、アオウキクサ（3 種）　　絶滅危惧種：イヌタヌキモ（1 種）

また、沼の岸辺に近い所に生育し特に貴重と思われる種類ではトキソウ、ヤマトキソウ、ミズチドリ、モウセンゴケ、タチモ、アイナエ、イヌセンブリ、オオアブノメ、ミミカキグサ、オキナグサの生育しているのが確認できた。

これらの植物はモウセンゴケを除きすべて絶滅危惧種に該当するものである。

モウセンゴケの自生が確認されているのは化女沼では 1 か所のみであった。

2.　化女沼治水ダム工事に伴って影響を受ける植物の保護を目的とする調査から

依頼された調査は、化女沼に自生する水生植物ということで、保全する植物も水生植物ということであったが、沼周辺の植物も調査し出現した植物も報告書に記載した。

調査は 1985 年（昭和 60 年）8 月から 1986 年 10 月である。

水生植物の保全には、池を造り移植をして保護することを前提にダムが完成後の常時水面と連結する高さの場所に池を造ること。その池は沼の周囲 5 か所であることの提案を記載した。

沼の水生植物の調査では絶滅危惧種のデンジソウは確認できず、新たにコバ

ノヒルムシロとオニビシが確認された。

3.　移植作業と地鎮祭

1987 年（昭和 62 年）7 月から 8 月にかけて 5 か所の池に移植作業を行った。地鎮祭も同年 10 月 20 日に行われた。

4.　ダムが完成した後の湛水試験が長引いたことにより絶滅したと思われる植物

化女沼ダム本体の完成に伴って 1993 年（平成 5 年）10 月からサーチャージ水位まで水を貯留しての長期間にわたるダムの検査が始まった。ところがその年は雨降りの日も少なく、田尻川から沼に取り入れる水量も少ないためサーチャージ水位まで水がたまらず、5 月になっても沼に貯めた水は移植した池の 1 メートルほど上まで水がたまったままの状態であった。そのような状態が続いたため、池の上部まで水をかぶった陸上の多くの種類の植物は枯死してしまった。水生植物も同じような状態であった。その後も沼に水を溜め続け 6 月 20 日より放水し常時満水位以下に水を落とした。

翌年の 1994 年（平成 6 年）7 月から 10 月に沼及びその周辺の植物調査を実施した。その結果を 1986 年（昭和 61 年）8 月から 11 月に行った調査と種類や種類数を比較してみた。

その結果、ダムの湛水試験後に行った調査で確認することができなかった種類は 149 種、その中で水生植物は 14 種であった。

調査で確認できなかった種類で県内でも貴重な水生植物としてミズニラ、コバノヒルムシロ、センニンモ、ホッスモなどがあげられる。湛水試験後、埋没種子の発芽によるものや 5 つの移植池に移植したもので生き残ったものなどが徐々に繁殖し現在では沼一面、水生植物により覆われるようになった。現在の課題は、増えすぎたハスやヒシ、ウキクサをどのようにして除去していくかである。

ダム工事に伴い沼の周囲の樹木の伐採や道路の拡張などとともにハマハナヤスリ、カキツバタ、シロカキツバタ、タチモ、アイナエ、キクモ、イヌセンブリ、フタバムグラ、マツムシソウ、オキナグサ、トキソウ、ヤマトキソウ等の種類も絶滅してしまった。

4.　終わりに

ダム工事の最中に植物調査をしている時、強い雨が降った後で沼に水が流れて入っていくのを見ていた時、それまで見たこともない稚魚が泳いでいた。その後数年たってオオクチバスやブルーギルを知ることになったが、それらの外

来魚が放流されたのもダム工事の最中だったのかもと思っている。

化女沼は 2008 年（平成 20 年）10 月にラムサール条約に登録地になった。ガンカモ類をはじめとする渡り鳥の越冬地となっている。ダムができる以前の化女沼はオオハクチョウやカモ類が飛来していたが水深が浅く、冬には沼全体が氷で覆われることも多かったためガン類のねぐら入りはみられなかった。

ダムができて、水面の面積も 2 倍になり水深も深いところで 4 メートルにもなり、沼全体が氷るようなこともほぼなくなったためマガンやヒシクイ，シジュウカラガン等が沢山飛来するようになった。

化女沼及びその周辺の植物もダムができることで絶滅してしまったものも多くあるが、貴重な植物の宝庫には変わりない。これからも様々な方法で、化女沼の動植物の保護活動を通し素晴らしい自然を守っていかねばと思っている。